

密教図像と別尊曼荼羅の構想

真 鍋 俊 照

真言密教の曼荼羅には、「両界曼荼羅」と「別尊曼荼羅」がある。別尊曼荼羅は密教画の一つであるが、その仏像を別尊法によって祈るといふ行為は、もともと一体のものである。つまり別尊という個別の仏像は、いかなる場合も現実の礼拝対象で成立する祈願をともなっている。したがって別尊曼荼羅の位置づけも同様である。また別尊をともなう儀式には祈願文、祈願状がともなう。ただし別尊曼荼羅の個別の作例の意図の解明はなかなか難しい。ということは一「祈願と別尊曼荼羅」の関係は、その多くが、正確な礼拝対象としての祈りの構想がその都度、必ず特定されているからである。それにくらべて両界曼荼羅の場合は、有名なものであればあるほど由緒や貸し借りの経緯まで記録が残されている場合が多い。その理由は、絵（法量）が別尊曼荼羅にくらべて図像と「安心⁽¹⁾」の関係で種々の存在価値が大きいことも理由のひとつとしてあげられる。両界曼荼羅が集団的な宗教行為の礼拝対象であることにくらべて、前者は個人的な心の奥に迫る宗教行

為となつて安心の利益^{りやく}を計ろうとするからである。それゆえ『別尊雜記』⁽²⁾等に説く本尊の多くは、両界曼荼羅中から一尊を選んで主役として位置づけ、新たに別の現世利益を目的として、それを達成し成就しようとする個別の感性を構想の中に秘めている。ところがこの発想は各尊の歴史的経緯をみてゆくと実に多彩な根拠を有していることがわかる。その理由は別尊の仏像の多くが両界曼荼羅より前に成立しているものも多くあるからである。また中国、唐時代に両界曼荼羅が恵果（七四六―八〇五）によってまとめられることになるが、それ以前の別尊法のいくつかは、すでにインドにおいて修法自体がヒンドゥー教等の影響をうけて行われていたという事実も少なくない。請雨經曼荼羅の經法の別尊曼荼羅には、何か密教の不思議な力を介在させている劇的な趣がある。雨乞法⁽³⁾（祈雨法とも）で名高い請雨經法の本尊・請雨經曼荼羅は、壇の前（奥）に掛ける大曼荼羅と、壇上にひろげて置く敷曼荼羅を一組として使用する。いずれも不空訳の『大雲經祈雨壇法』に

説くもので、増益法を目的とし、雨を降らせるために使われる。真言密教が、鎮護国家を中心に展開した宗教であるならば、その主流である農作物の収穫は降雨によって左右されることが多い。いつ雨に恵まれるかという経法による祈雨は、まさにその意味では国家的行事の代表でもあった。請雨経法は、中国で確立し、とくに天宝五年（七四六）、長安に帰った不空三蔵は、たびたび皇帝にまねかれて雨乞法を行なったという。請雨経曼荼羅の典型は、全面に海上を描いた波が一面にひろがる。平安時代に勧修寺慈尊院で活躍した興然の『曼荼羅集』三卷（MOA美術館、東寺旧蔵）によると、方形二重式の区画が線引きされ、波間に墨線がみえる。この絵の中から降雨を決定する根拠は必ずしも明らかではない。しかし、曼荼羅内では中心の釈迦如来と八部衆や龍王が、目に見えない威力を持っているということである。八大龍王も八部衆もいずれも『法華経』に登場する護法神である。このことは、漢方薬による効果のメカニズムに類似している。その薬の入った箱は、絵の内院に該当する。そこは「七宝水池」とよばれ、海中の海龍王宮をあらわす。図像では、宮殿内に主尊・釈迦如来、両脇に観音（右）と金剛手菩薩を配置する。少し下方に輪蓋、難陀、跋難陀の三大龍王が、中心の釈迦如来に向かって合掌している。同系の図像では、外側の外院四方は、四隅に水瓶を、四方に上半身が菩薩形で下半身を水中に没した合

密教図像と別尊曼荼羅の構想（真 鍋）

掌形が龍王形で描かれている。頭上は、頭光内に三・五・七・九頭の龍をいたたく四龍（東・西・南・北）が配置する。天空に降雨を願う行者の立場からすれば、宇宙の四方八方はもとより空間の隅々にいたるまで、その支配者たる龍王の不可思議な力をよびおこし、それに直接、大量に落下させてもらうよう祈るのである。現在、東寺（京都）に伝えられている鎌倉時代の請雨経曼荼羅は、紙に墨で描かれた単純なものである。鎌倉中期の作画であって、縦四六・七、横三〇・三センチメートルの小形であるが、図像は和様化されている。空海が天長元年（八二四）に神泉苑（平安京）で修した請雨法のように『弘法大師行状絵詞』（東寺本）に描写されている。それには池の中島に蛇が出現している図が見えるところから、当時は降雨の使いとして曼荼羅に登場する蛇形が、現実の景色の中にもあらわれたのである。平安時代末期になると、九回も法験があったといわれる雨僧正仁海の頃の修法壇場には、正面に大師御影（空海の肖像）と、請雨経曼荼羅を懸け、大壇、護摩壇、聖天壇、十二天壇を設置し、降雨を祈願したという。この場合、祈る相手は天体宇宙のように雨をもたらす天空ではなく、正面の曼荼羅の中尊の釈迦如来である。なぜ天の主ではないのか、それは宇宙的生命の根元に位置する釈迦だからである。その釈迦仏が宝処三昧に入ることにより、雨は宝珠と化したのである。大量の雨はここに内蔵されている。それ

密教図像と別尊曼荼羅の構想（真 鍋）

ゆえに大切な宝の中から釈迦のみが甘露の雨を降らせることができるのである。このとき雨が降りそうになると、善女龍王像が愛宕山の上に応現するという。金剛峯寺に伝わる定智筆「善女龍王像」（国宝）では、着彩の中国官服を着て皿に盛った宝珠を持ちながら、雲中にたたずむ雄大な姿を描いている。これをスケッチ（醍醐寺蔵）とくらべながらみるとなかなかリアルである。『御遺告』によると、インドの無熱達池に住んでいたものが、真言の奥義をしたって涌現したもので、蛇形の化身とされている。八寸（二五センチメートル）の金色蛇で、九尺（三メートル弱）の蛇の頂上にいるというから、これらの蛇形は「善女龍王像」の暗い画面をよくみると、裾の後に蛇の尾が描かれていることから察知することができる。請雨経曼荼羅には、掛曼荼羅の他に、壇上に置く敷曼荼羅がある。図像の原版は、『陀羅尼集経』第十一、祈雨法壇に所説がみられる。牛糞（クマイ）をまぜた墨汁を用い、絵筆によってかなり速いタッチで龍のかたちを描く。また池の波を同じ墨線できりかえすようにつらねて、画面をうめてゆく。そして四方に池の中から半身出した龍王の合掌像を描いている。クマイを顔料の中にまぜるにより魔除けの意を強くし、このことにより請雨経法の敷曼荼羅は一回限りしか使用しないのである。

仏眼曼荼羅 仏眼曼荼羅は、現存する優品が真言宗（智山派）の神光院（京都市）に残っているので、彩色本の典型的な形式

をうかがうことができる。構図よりみて興味深いことは、曼荼羅そのものが胎蔵界系の流れに属していながら、所依の経典は金剛智訳の『金剛峰楼閣一切瑜伽瑜祇経』金剛吉祥大成就品第九にもとづいて説かれていることである。図像では、全体の構図は三つ重ねられた八葉蓮弁が放射状に配置され、周囲には第一華重（中央下より）正面向きの一切仏頂輪王が描かれ、手に金剛宝輪を持っている。そして右回りに七曜の使者（獣座）を描く。中台（中心）には我身といわれるが、それに等しい仏眼仏母を配置する。第二華重は金剛薩埵（金剛手）を当て、やはり右回りに八大菩薩、すなわち観自在、虚空蔵、金剛拳、文殊師利、発心転法輪、虚空庫、撰一切魔を描く。第三重はこれらの外護（まもり役）として八大明王をめぐらし描いている。四隅は内四供養菩薩、外院は外四供と四撰菩薩である。興然の『曼荼羅集』には外院に八方天を加え合計四五尊を描く。作例としては、彩色本がこの他に竹本家蔵と品川寺蔵にある。仏眼法の本尊として使用されてきたが、滅罪、降伏、増福のために祈願されたものである。その意味は、文治三年五月二十六日の撰述になる覚禪の写本（拙稿『密教曼荼羅の研究』美術出版社、一九七五年、三五―二四九頁）によると、四種法では息災（自然の災いを消滅する）を目的としていることがわかり、それは弘法大師の口伝であるという。

薬師曼荼羅 古代から流布している薬師曼荼羅は、玄奘訳の

『薬師本願功德経』にもとづき、中央に薬師如来の坐像を配置する。左手に薬壺を持ち、右手は施無畏印で、その周囲に立像の八大菩薩が左右に四軀ずつとりかこむ。したがって、『別尊雜記』や『覚禪鈔』には薬師八大菩薩曼荼羅とも別称する。中尊はもともと釈迦如来の意樂であった。つまりこの曼荼羅は、釈迦の説会の形式をとっていたと考えられる。『薬師本願功德経』によると釈迦が初転法輪（釈迦八相の一つ、成道後にサールナート＝鹿野苑で五人の比丘にはじめて説法をしたこと）の後に、インド各地を巡歴して法を説くことになり、その晩年にマガダ国を出てガンジス河を渡る。そこから北方に行きヴァイシャーリー（吠舍離、Vaishali）にたどりつく。そして最後の会座（釈尊をとり囲んで円陣をつくる）を行なう。その釈迦説法の形式が薬師八大菩薩曼荼羅の構図になっていると考えられる。薬師如来の方角は東方で、浄土は浄瑠璃（瑠璃光）に輝いている。この場合、この薬師浄土に住してその場に導くというより、衆生に対して現世利益を願うことを目的とする。したがって「医王善逝」と呼称されるが、奈良時代には有名な薬師寺が建立された。これは持統天皇が発願した病氣平癒のためのものである。『薬師本願功德経』には、重病でもうこの世に命がいくばくもないというときに、存命法の一つとして説かれている。それは朝六時夜六時の二回、欠かさず薬師如来を供養し、四十九遍も『薬師本願功德経』を誦し続けた

密教図像と別尊曼荼羅の構想（真鍋）

という。その際に命を長らえるために四十九の燈明に火を点じ、同時に四十九天を描いた五彩色の幡を作成する。すると天皇の身に血の気がさして意識がもどり命が回復したという。またこの薬師如来の功德は、九つの横死（変死）の難をのがれるともいわれ、この薬師信仰は今なお続いている。別尊曼荼羅として薬師如来をとり込むゆえんは、もう一つの大きな密教の理論である十二の大願との接合であろう。十二という数からみるならば、薬師如来をまもり、またその持経者を守護する十二神将の存在は、外の造型とみなされる。むろん内に秘められた精神世界の根幹にあるものが、薬師如来が修行中につくりあげたといわれる「十二大願」である。この十二大願は、薬師如来と信者の関係を維持してゆく必須の条件・約束ごとでもある。

大仏頂曼荼羅 この曼荼羅は、次に述べる一字金輪曼荼羅と混同されやすいが、空海所伝といわれる金輪曼荼羅の構図を展開している。図像は竹生と龍王を加えたものである。『覚禪鈔』には大仏頂、『別尊雜記』では一字金輪という。一字金輪曼荼羅「一字」とは梵字ポロンをあらわしたもので、金輪仏頂のシンボルである。単独像より曼荼羅が多く、曼荼羅形式は方形と八葉蓮弁を中心とした円形に分けられる。金輪には釈迦と大日があるが、仏・菩薩の功德が中心の一尊に帰するという考えかたから、大日金輪を主役とするものが

密教図像と別尊曼荼羅の構想（真 鍋）

多い。図像は、不空訳『金剛頂經一字頂輪王瑜伽一切時処念誦成仏儀軌』（略して「時処軌」という）にもとづく図解で、虚空を表現する鮮やかな群青を背後に、中央は五智宝冠を頭上にいただく大日金輪が智拳印を結ぶ。また周囲は下より右まわりに輪宝、珠寶、女宝、馬宝、象宝、主藏宝、主兵宝、仏眼尊を配し、除災、増益の修法に掛けられる。まれには安産の本尊となることもある。中央の大日金輪を重視するのは、金剛界の大日が胎藏界大日の投影のような役割を果たして、この両者の世界を統合するものを不二と解釈し、画像法を組み立てるからである。

尊勝曼荼羅 基本的な構想は、まず中央に大円相を描き、下方に、半月形（降三世明王）と香炉と三角形（不動明王）の区画を配置する。天衣、瓔珞など細部にわたって切金が多く使われている。その大円相内は二つの部分からなり、中心の大日如来（大日仏頂に同じ）の一円と八大仏頂・八大菩薩の小円よりなる。すべて白色地で、円と円のあいだには、八方に宝瓶、中央の四方に輪宝、縦横の区切りに三鈷を配置する。莊嚴は三鈷を結ぶ綵帯がゆらぐように描かれる。除災、除病、滅罪、求子（子が授かること）を祈る修法に用いられる。中央の大日如来は五智宝冠をいただき、智拳印を結ぶ。これは大日如来が仏頂三昧に住した姿で、七頭の獅子の背にある蓮花座上にあって結跏趺坐する。

大勝金剛曼荼羅 きわめて遺品が少ない大勝金剛を中心にした修法用の曼荼羅である。仏眼曼荼羅とほぼ構想が似ている。内院は八幅輪上に、中心は十二臂の大勝金剛が蓮花座の上に坐す。めずらしい十二臂の持物は二手が智拳印、右手に五鈷杵、摩尼、鉤、鎖、劍、左手に蓮花、羯磨、索、鈴、輪をもつ。この本尊の顔を見ると、上目づかいの異様な形相をとり、五仏宝冠をいただく。その四方下段右まわりに羯磨、五鈷杵、三弁宝珠、独鈷杵の三昧耶形を描く。

仁王経曼荼羅 仁王経にもとづく法会（仁王会）は鎮護国家を祈る秘法で、空海も弘仁元年（八一〇）十月二十七日に高雄山寺で嚴修している（『性靈集』巻四）。しかし、このとき使われた通常の仁王経は、この曼荼羅ではなく、五大力菩薩を中心とするものであった。その五大力菩薩は、現在は高野山に伝えられているが、明治二十一年（一八八八）の大火で二幅を焼失して、今日では三幅のみが存する。もとは東寺にあったものを豊臣秀吉が高野山に移したものである。今、残っている東寺本は、平安後期に東寺でも活躍した小野僧正仁海（九五一一一〇四六）の指導により、仏師如照が描いたものである。画面は三重の形式をとり、東、西、南、北に門を描く。内院は中央に二臂の不動明王（右手に劍、左手に輪宝）が坐す。図像は、仁海によるもので心覚系統の図像に一致し、図は、定海によるもので覚禪系統の図像に一致する。それぞれ四方には四方

菩薩、四隅には内四供養菩薩を円相におさめた三昧耶形を描くが、内容と配置が若干異なる。第二重は四方に四大明王が配置される。これも東西南北の順に見ると、軍荼利、金剛夜叉、六足尊、降三世であるが、降三世、六足尊、軍荼利、金剛夜叉と違う。第三重（外院）は四門内に四摂菩薩、四隅に外供養菩薩、これらの各尊のあいだに四天王および十二天中の四天を加える。これは仁海の増益図といわれているが、心覚の『別尊雜記』はもとより『図像抄』にも同様の図像の配置がみられる。有名な醍醐寺の「仁王経曼荼羅」（重要文化財）はこれにあたる。また、定海の息災図は、覚禪の『覚禪鈔』に図像の配置がみられ、久米田寺の「仁王経曼荼羅」（重要文化財）がこれにあたる。それぞれ描かれる方位は、図の上方を東、下方を西にして配置され、四種法によって掛けられる方位も同じであることを『三宝院流洞泉相承口訣』は記す。したがって幸運を増進させる「増益法」の目的もかねそなえ東に、罪悪や災害を除く「息災法」としては北に掛けて儀式をおこなうことになる。

宝楼閣曼荼羅 宝楼閣経法にもとづくもので、正しくは「宝楼閣経曼荼羅」という。この儀式は堂塔供養や滅罪を目的として宝楼閣の功德を賛嘆しながら、その建物のなかにあらわれる説法相の釈迦如来に祈願する。図像はその宝楼閣という大摩尼殿（『理趣経』などに説く）をテーマにしたもので、「宝」

とは金剛宝でつくられた構成上の材料のことをいう。したがって、このなかには曼荼羅中の諸尊がことごとく居住して無限の活動をつづけるという。全図の構想は、不空訳の『大宝広博楼閣善住秘密陀羅尼経』による。その中巻（画像品）によると、七宝の宝楼閣中に釈迦如来（説法印）を描き、その左右に四面十二臂の金剛手菩薩と四面十臂の宝金剛菩薩を配置する。さらに金剛手の下方には吉祥天女、金剛使者天女を置き、宝金剛菩薩の下方には餉棄尼天女、花齒天女を置く。そして、これらの諸天が池中より咲きでた一本の蓮花をとりかこむように供養することを述べ、四天王等が圍繞する。図像の大部分は不空訳の所説に一致する。すなわち正面は三間四方重層の宝楼閣を描き、二層目の宝形造りには中央内部に宝珠を安置する。初層は転法輪印の釈迦如来を中央に、右は四面十臂の宝金剛、左は四面十三臂の金剛手を描く。画面に残る鮮やかな丹青が色どりをそえる。

法華曼荼羅 釈迦と多宝仏の二仏を宝塔内に配置した法華経法会の本尊である。息災延命と滅罪を中心として儀式をおこなうが、この法華経を転読しておこなう法華経法会は、性空（書写山円教寺の開基）が金剛薩埵より口訳相承した秘法という。『妙法蓮華経』宝塔品の所説を伝えた『観智儀軌』によると、「基壇三重（院）」とあるが、図像は二重院よりなり、内院は宝塔内に釈迦・多宝仏が並座する部分を、八葉蓮弁が支えるか

密教図像と別尊曼荼羅の構想（真 鍋）

のごとく背後に描く。蓮花中に東北隅より、弥勒、文殊、薬王、妙音、常精進、無尽意、観音、普賢の八大菩薩をめぐらし、四方には舍利弗、目犍連、摩訶迦葉、須菩提の四声聞がむきあう形式で坐す。外院は通常の三重院とは違って、円相内に東門は金剛鎖、南門は金剛鈴、塔前は金剛鉤、北門は金剛索の四摂菩薩を配す。

六字経曼荼羅 六字とは六観音の種子をいう。醍醐寺の明仙僧都系の曼荼羅で、『六字神呪経』『請観音経』にもとづく。息災、呪咀、調伏、安産の祈願のための本尊として理性院で掛ける。構図は、中心の大月輪のなかに金輪仏頂尊（いわゆる釈迦金輪）を描く。定印上に輪宝を、着色のほうは垂直に立て、紺紙のほうはやや斜めに描く。ともに螺旋形で胸にポロロンの種子を示す。周囲には六観音を配置して、あいだに種子を置く。六観音の形像は『別尊雜記』第一一（六字経）によると、真下より右まわりに聖観音（「正」ともいう）、六面二臂の千手観音、馬頭観音、十一面観音、准胝観音、如意輪観音で、下方の両隅に不動明王の立像と、大威徳明王を描く。中央の下方には波間に岩座上の円鏡を拝し、除魔を念ずる供養天がひざから上をあらわしながら合掌形をとる。六字経法は、本尊となるべき釈迦金輪の他に聖観音、六字明王、六観音がある。

理趣経曼荼羅 この曼荼羅の所依の經典である『理趣経』は、

最澄、空海、円仁、円珍が中国より持ち帰ったが、今日では空海がひらいた真言密教でもっとも重視され、毎朝の法会で読誦されている。不空訳の『理趣経』では、十八会の曼荼羅が説かれている。そのねらいは、大日如来が金剛薩埵のため一切諸法がもともと清浄なものであることを説くことに由来する。図像は、三重の尊形曼荼羅を中心に、その周囲に十六会の種子（梵字）による計十七会方形曼荼羅を組みあわせる。曼荼羅に描かれた十七段の法門、主尊を一覧すると、(1)大楽（金剛薩埵）、(2)証悟（大日）、(3)降伏（降三世）、(4)観照（観自在）、(5)富（虚空蔵）、(6)実動（金剛拳）、(7)字輪（文殊）、(8)八大輪（発心）、(9)供養（虚空庫）、(10)忿怒（摧一切魔）、(11)普集（大楽金薩）、(12)有情加持（大自在天）、(13)諸母天（七母天）、(14)三兄弟（三兄弟）、(15)四姉妹（四姉妹）、(16)五具（五部具会）、(17)深秘（五秘密）である。尊像の曼荼羅を部分的に集めた白描の図巻は、これまで醍醐寺本、円通寺本、旧岩崎本（東洋文庫蔵）が知られている。しかし、理趣経曼荼羅を一図のなかに説会を整然と図式化して抽象的な画面を展開したものは他に類例がない。また数少ない彩色本をみると賦彩が失われているとはいえず、むしろかすしい般若理趣の感覚的な色調をよく保っている。また界線の切金は効果的であり、それによって生ずる空間の文様などは宋風の影響が強い。

童子経曼荼羅 童子経とは、その名が示すとおり童子（子供）

がうける恐怖（悪夢もふくむ）や、治りにくい病気をとりのぞくために祈願する童子経法のこと、その本尊がこれである。古くから醍醐三宝院流で使われたものが多く、それらは阿闍梨の意楽（伝統をふまえて創作すること）によるものである。現存している例は、図像が智積院本や旧東寺本が知られている。中央には童子の寿命を末長く保つように、また悪魔を追いはらう乾闥婆王を大きめに表現し、まわりに十五鬼神および十五童子がセットで中心をとりかこむように描かれる。十五鬼神はそれぞれ、「弥伽迦」（サンスクリット名はマンジュカ。以下同様）は牛形、「弥迦王」（ムルガラージャ）は獅子形、「騫陀」（スカンダ）は「鳩魔羅」天そのもの、「阿波悉摩羅」（アパスマーラ）は野狐形、「牟致迦」（ムステイカー）は獼猴形、「摩致迦」（マトリカー）は羅刹形、「閻弥迦」（ジャミカー）は馬形、「迦弥尼」（カーミニ）は婦女形、「梨婆抵」（レヴァティ）は狗形、「富多那」（プータナー）は猪形、「曼荼難提」（マトリマシター）は猫見形、「舍究尼」（シャクニ）は鳥形、「捷吒婆尼」（カニタパニニ）は鶏形、「目佉曼荼」（ムカマンディティカー）は熏狐形、「藍婆」（アーランバー）は蛇形として描かれる。これら十五鬼神は『童子経念誦法』に説かれているが、それぞれインド起源の図像名であることは、サンスクリット名が一致する点でも明らかである。しかし曼荼羅としての構成は、これまでわが国に伝わった系統とは異なるものである。平安

密教図像と別尊曼荼羅の構想（真鍋）

時代に活躍した高野山の学僧・成蓮房兼意によると、この曼荼羅の図像は中国（唐本）から渡来したものである。星曼荼羅 二種あり、円形の曼荼羅と方形の曼荼羅の違いがある。ともに平安時代以来隆盛をきわめた天変、除災、延命を目的とする北斗法の本尊で、いずれも三重よりなる。遺品は少ないが、円形ではボストン美術館本、方形では旧東寺宝菩提院本（応永五年銘あり）が知られる。このほかに唐本の系統である来迎形式の白描「北斗曼荼羅図」（東京藝術大学蔵）や絹本「星曼荼羅図」（ボストン美術館蔵の額装および別本の二点）がある。この海外流出のものは、鎌倉時代末期の作と考えられるが、構想に動きのある流動性をたくみにとらえている曼荼羅として興味深い。つまり来迎を前提にして、北斗七星などが並列して白雲に乗じて下降してくるさまは、方・円の両曼荼羅にはみられない異質な表現である。図像は、方形の曼荼羅で、内院の中央に、須弥山上の釈迦金輪仏頂が坐す。その前面には土宿、熒惑がならび、そこから右まわりに九曜のうち羅喉と北斗七星を配置する。第二重は十二宮、第三重には二十八宿などを円相内に描写し、合計五十七尊で画面を構成する。構図のなりたちを考えると、ともに共通することは、円形も方形も、釈迦金輪仏頂を中心に三重の宇宙空間をとらえて図解化している点である。北斗法はその儀式を勤修する僧も、作壇作法や観想（観念の世界）の過程において九曜など

密教図像と別尊曼荼羅の構想 (真 鍋)

をとらえるので、眼前に彩色ゆたかな大宇宙を見ることである。このことは同時に、心のなかにも小宇宙を見ることになる。したがってこれらの「図解」の構想と「修法」は一体のものであり、それは、行者の心中においてのみ成立する。

1 東禅城『密宗安心三品悉地四種法身事』(長谷宝秀編『真言宗安心全書』巻上、六大新報社、一九一三—一九一四)。

2 心覚『別尊雜記』原本、第一巻(昭和五十二年六月の仁和寺の調査による。)五七巻、縦三一・〇×横三一・六センチメートル、同、第五巻、三三九×一九六センチメートルにおける本論引用の別尊曼荼羅図像。

3 祈雨法・深沙大将諸像一巻、醍醐寺蔵(大正図、第四巻に所収)。

〈キーワード〉 別尊曼荼羅、別尊法、四種法、図像、覚禪、構図
(四国大学教授・文博)

新刊紹介

立川 武蔵 著

マンダラ観想と密教思想

A5版・七八四頁・本体価格八、〇〇〇円
春秋社・二〇一五年五月